

## 東京都戦時託児所を訪ねて

附屬幼稚園 菊池 ふ じ の

東京都水川神社戦時託児所―目黒區姿町五五九 東横線府立高  
校前下車

水川神社の山門をくぐると先づ目についたのが、墨根絆やかに  
立てられてある東京都水川神社戦時託児所の看板である。

幽邃な神社の境内右手の長さ略々六間、横二間半の總二階の建  
物、これがこの度の戦時託児所に當てられた建物である。以前は  
氏子の集會等に使用されてゐたといふ。全部疊敷、床の高い建物  
である。と云つても周圍には木のらんかんが廻らされてゐて、幼  
兒を遊ばせるのに少しも危ふげはない。二階はやはりこの宗教  
に關係のある宗教學校の學生の用に供してゐて、戦時託児所は  
この階下、三間ぶつ通しの大廣間を借用してゐるのである。

この地區は、今日始めて訪れたこの他所者にもそれと氣付き得  
る程の住宅地區。それ故に託児の集り工合は如何かと、日向で數  
人の幼兒の相手をして居られた保母さんに伺つて見ると、申込み  
はかなり多數あるのださうだが、現在來てゐるのがこの數人とい  
ふことである。戦時託児所の事がよく分らないので、出さうか出  
すまいかと一寸日和見をしてゐるかたちでもあらうか？出征家  
族のこのお子さん―お母さんは今度から何か働き度いと云つて  
居られるのです。こちらは魚屋さんの御子さんの兄弟、これは下  
駄屋さんのお子さんと言つた工合に、皆今度の戦時託児所の眼目  
とするところの「一人の有閑者なも無からしめる」といふところに

びつたりあてはまる。こゝへ、方面館へ事務の打ち合せに出向か  
れたといふ主任保母の村田先生が歸つていらした。村田先生は、  
今まで芝の方面館で、この事業の経験を積まれていらした方。今  
度こゝへ主任保母として御轉任になられたのださうだ。

「地元の婦人會や方面館の方達の肝煎りで、同覽報を廻して下さ  
つたら、申込みが又大變増えてゐました」。とのお話。「まだこの  
通り、何も整ひませんで」と謙遜せられるが、二人の有資格保母、  
二人の奉仕保母、それに保健婦一、醫師一、小使一と人員が揃つ  
たら、この建物と莊嚴幽邃なこの境内、思つて見てこゝの託児所  
の活躍が想像出来る。保育料・保育時間・給食・おやつなど、菫宿課  
長のお話の通り。この大きな建物と別に、小じんまりしたも一つ  
の建物がある。やがてはこゝが乳兒室になる由。日當りのいゝ別  
棟で、乳兒室にはもつてこいのいゝ建物である。話の順序が前後  
してお申譯ないことであるが、こゝの戦時託児所の所長さんは、  
この神社の神主様で、今日は御不在であつた。所長さんの御意見  
では、子どもは幼い時から、敬神崇祖の念を養はなければいけな  
い。これからは朝な朝なあの拜殿に合掌させ額づかせて、この精  
神を幼い時から培ふことにしようとお申されておいでとの事。

この戦時託児所の存在と職能とが地元の方達に普及浸透され  
て、この全機能が充分發揮せられる日の一日も早からんことを祈  
つて止まない。

品川戦時託児所——品川区南品川五ノ二〇三、省線大井町驛下車方面館がそのまゝ、戦時託児所になつたといふ標本として、こゝを拜見する。

お支關に着いた瞬間、感じた。新しく始めると云ふのではなく、もうごつしりした根柢の上でお仕事をし居られるのだなどいふ感じ。事務所に入り、方面委員長、館長、保母長その他の事務の方達が、大勢いらつしやるのを拜見しては愈々この感を深くしたのであつた。そして、いろいろの完備した印刷物——受託児保護者職業別・受託児給食献立表・乳児保育豫定案・乳児室の一日、幼児一日の豫定、保育案——と、實に盡されて餘す所なき多くの印刷物を拜見するに及んで、一層、社會事業としてのがつちりした存在であることと思はせられたのであつた。そしてこの乳幼児の託児といふお仕事は、こゝの方面館の數多い事業の一つのお仕事に過ぎないことが分かつた。診療室なども揃つたものであつた。

乳児は、東京都の規定で十人。ベット數が十個と限られてゐるので、幼児は一〇八名在籍。毎日申込みが殖えて來て收容しきれないので、二十日から開所の、程遠からぬ品川寺の戦時託児所の方へ廻す積りとの齋藤保母長のお話であつた。

乳児は保健婦の方が主に受持つて居られ、お米は各自持参せしめられて、晝食には御飯とお菜とを給して居られる。幼児の方は、御飯は各自持参し、お菜をこゝで給して居られる。お八つも與へて居られる。こゝで事業を始められてから滿四ヶ年も経過して居られるので、お八つにしろ醫藥にしろ、燃料にせよ、しつかりとした配給割當を受けて居られるので、この仕事に誠に磐石の感じを與へられるのであつた。併し、お八つの配給といふとすぐ、お菓子な聯想するのであるが、一ヶ月の統計表を見ると、月三十

回の中、駄菓子、餡、煎餅、などの所謂從來のお入つたるものは十二回に過ぎず、馬鈴薯、竹輪、里芋、ほうれん草などの配給を受けしものを調理鹽梅してお入つとして與へられてゐるのであつた。幼児はかうして時々變つたお入つをこの上もなく喜んで頂くとのことである。この他、印刷物に現はれてゐる貴重な實踐、例へば、保育案にせよ、一日の豫定案、躰要項などにせよ、一々御紹介致し度いのであるが、紙面の都合で割愛しなければならぬのを遺憾とする。

尚ほ、こゝでは幼児防空訓練が行届いてゐるといふことをかねて聞いてゐたので、齋藤保母長に伺つて見た。幼児は、一朝事ある時には皆、乳児室の鐵製ベット（十個備付）の下に待避する。硝子窓に面した方には皆毛布を掛けて、硝子の破片の散亂を防ぐ、各幼児は防空帽子を持参、椅子に敷いてゐる。警戒警報時にはその紐を解いておく。幼児は各々自分で被る。目、耳をおほひ、伏せの姿勢をとらせる稽古を時々して居られるといふ。

最後に、方面館が戦時託児所になつて變つた所は？と伺つた。一、受託の範圍が廣くなつたこと（今まではカード階級の人のみを受託する規定であつた）二、保母の心構へが違つて來たこと三、保育料、保育時間等が多少異つて來た。こゝ等であつた。

尚ほ、こゝのみならず今度の戦時託児所全般に就てゐるが、虚弱児には夏季等轉住保育を試みるといふ事であるが、こゝの方面館では、以前からこの轉住保育を試み、子供の體育上に好結果を齎してゐて多くの人から感謝を受けて居られるといふ事である。かくして、現實に目に見えて人の役に立つてゐるお仕事に従事して居られる方々の心の中なる満足感に或る羨望を感じつ、辭したのであつた。